

<研究ノート>

江藤涛雄と中国文物～『関野貞日記』から

村松弘一

要約

江藤長安荘という骨董商を営んでいた江藤涛雄は、大正から昭和戦前期にかけて、大学や博物館に中国の文物を納入した人物として、受け入れ原簿や目録にはその名前が見えるが、その活動実態はよくわかっていない。長年、江藤を追い続けていた筆者は、偶然にも本年担当した授業で講読した『関野貞日記』のなかに彼の名を見つけることになった。そこで、本稿では、『関野貞日記』の江藤が登場する記載を収集・整理し、その前後の事項も含め解説を付し、北京での江藤の活動に関する情報の集約をはかることを目的とした。その結果、大正7年「遊西日記」の北京での記事10件、昭和初期の3件を抽出することができた。そこからは北京の骨董市場や文物収集においての日本人の骨董商・収集家のネットワークを見ることができる。また、最後にこの調査の間に入手した江藤長安荘主催の「中華金石書画展覧会」の目録についてもふれる。

キーワード

江藤涛雄 関野貞 北京 中華金石書画展覧会 中国文物

1、関野貞「遊西日記」(1918年～1920年)について

筆者が担当する人文学部歴史学科設置の「東洋史演習Ⅱ(朝鮮)」では2018年度より3年間にわたって関野貞研究会編『関野貞日記』(中央公論美術出版、2009年、以下『日記』と称す)を講読している。関野貞(1868年～1935年)は東京帝国大学教授をつとめた建築史学者・考古学者である。彼の残した日記を整理し、翻刻したものが『日記』である。授業では、これまで明治35年(1902年)・大正4年(1915年)・大正5年(1916年)・大正6年(1917年)の4年間の朝鮮での日記を読み進めてきた。初めての朝鮮半島の旅を記した明治35年日記には京城・開城・慶州等を訪問し、幣原旦・萩原守一ら外交官とも交流している。大正4年以降は、朝鮮総督府の治政下にあった朝鮮半島の考古発掘にたずさわった。『日記』には平壤の楽浪郡の発掘状況などが記されており、東京大学総合博物館小石川分館がWEBで公開しているフィールドカードと合わせると、当時の様子がよく理解できる¹。『日記』の興味深いところは、

むらまつ こういち：淑徳大学 人文学部 教授

このような学術面に関する事柄はもとより、朝鮮半島で感じた近代日本人の朝鮮半島への雑感や現地人・日本人の人々とのネットワークを知ることができる点にある。

このような近代日本人の東アジアでの活動を知ることのできる『日記』のうち、2020年度の授業では、1918年(大正7年)の「遊西日記」と総称される一連の日記の冒頭部分を読み進めることとした²。この「遊西日記」と名付けられた『日記』は、朝鮮半島・中国(7ヶ月)、シンガポール(19日)、インド・スリランカ(5ヶ月)を經由して欧州(イギリス・フランス・スペイン・イタリア・スイス、10ヶ月)、米国(1ヶ月)に至る約2年の旅を綴った日記である。関野は1895年に帝国大学工科大学造家学科を卒業後、奈良県技師等を経て、1901年に東京帝国大学助教授着任、この旅は助教授時代に文部省留学生として派遣された。関野はすでに1906年、1907年、1913年に中国を訪れていて、大正7年は4回目の中国訪問であった。

関野の世界一周留学の旅は1918年2月20日、東京駅から出発する。見送りには東洋史学者の白鳥庫吉、服部宇之吉ら300人が集まった。2月22日には京城に到着し、李王家博物館や朝鮮総督府博物館を訪問するほか、長谷川好道朝鮮総督、宇佐美勝夫内務部長官、小田幹次郎・浅見倫太郎ら総督府官僚や小場恒吉・野守建・小川敬次郎・谷井濟一ら建築・考古学者と交流し、3月6日に京城を出発した。翌日に奉天に至り、そこから中国東北部、すなわち満洲をまわり、北京へと旅は続く。旧満洲では大連・旅順や奉天(瀋陽)などをまわり、203高地や清朝の瀋陽故宮・黄帝陵なども訪問した。その後、関野は3月17日に北京へと入り、7月31日まで滞在することになる。

2、江藤涛雄

『日記』を読むと、旅のなかで、関野が史跡や古美術店を巡る時、1人で行くのではなく、必ず滞在先の街に居住する日本人の協力を得ていたことがわかる。朝鮮の発掘現場では、谷井濟一や岩井長三郎という帝大の後輩筋に順番に同行してもらい³、満洲では小野木孝治、弓削鹿治郎、国沢新兵衛、島村孝三郎ら建築分野・考古学分野の官僚・技術者の協力を得ている。彼らは帝大の卒業生で、現地での帝大ネットワークの強固さが感じられる。

さて、北京でも関野は現地在住の人々に案内を受けながら、琉璃廠や前門周辺の古美術店を度々訪れている。その時、常に同行していた人物に武内金平と黒田幹一、そして本稿で特に取り上げたい江藤涛雄という人物がいた。江藤涛雄とは誰なのか。筆者は以前、この人物について調べたことがある。筆者は2010年1月に丸善丸の内本店ギャラリー・学習院大学史料館で同時開催した特別展「知識は東アジアの海を渡った—学習院コレクションの世界—」(学習院大学開学50周年記念事業)の列品解説を書く際に、度々、彼の名を見ることになった⁴。学習院大学史料館には「旧制学習院歴史地理標本室移管資料」と名付けられた資料群がある。受け入れ原簿によれば、1922年～1925年(大正11年～14年)にかけて毎年、唐三彩や漢代の明器、玉器、磚、造像銘などの中国文物を江藤から購入している⁵。このほか、東京大学文学部所蔵の93点の考古文物も、学習院と同じ時期、大正12年～大正15年、昭和2年、昭和3年に、江藤から購入、寄贈されたものである。そのなかには、殷墟出土の鳥型骨笄や唐三彩(胡人俑・武人俑・女子俑)、漢代の明器などがある⁶。

また、東京大学東洋文化研究所には1931年(昭和6年)11月7日に江藤氏より受け入れた「仏三尊磚」(六朝造像磚)があり⁷、東京芸術大学の「白釉花文枕」も江藤を經由して所蔵となった中国文物である⁸。個人のコレクションでは、中村不折と関係があり、早い時期には、直接の取引ではないが、1914年(大正3年)2月9日に、江藤涛雄が蘭州で買い付けてきた「草書經三卷」が田中文求堂を通じて納品されて

いる⁹。そのほか、「摩訶般若波羅蜜經第十四」(梁天監十一年写本)¹⁰、「十六国後秦弘始四年遼東太守呂憲墓表」¹¹、「行書尺牘卷」(唐・如意元年(692年)頃)¹²等も江藤から中村不折の手に渡り、現在、台東区立書道博物館に所蔵されている。さらには現在杏雨書屋蔵となる羽田亨旧蔵敦煌写本146点も昭和14年～17年に江藤より羽田が購入したものである¹³。このように、大正3年から昭和17年までの江藤涛雄の足跡は彼が扱った中国文物を収蔵している大学や博物館の中国文物を通して知ることができるが、肝心の「生きている江藤涛雄」の姿をうかがえる資料がほとんどのこされていない。山中商会やフランスのC. T. Loo(ルー)のような著名な古美術商であれば、伝記や関連資料がまとめて刊行されているが¹⁴、江藤涛雄については本人が残した日記や評伝等もなく、彼の経営した会社「江藤長安荘」についても詳細はよくわからない。

このほか、わずかであるが、江藤の略歴などについてふれた文章があるので、いくつかとりあげたい。まず、著名な骨董商の広田不孤齋は以下のように述べている。

この人は日本の雑貨とか薬品類を販売する商人とし中国・陝西省の漢中というところに滞在していたということがわかっています。雑貨や薬品を売りつつ、様々な中国の美術品を日本に売却していました¹⁵。

ここでは、日用品や薬のバイヤーという職業を隠れ蓑に中国文物を収集していたこと、陝西省西安の南の漢中を拠点にしていたことがわかる。漢中にいる理由はよくわからないが、茶や杜仲などの漢方薬材が漢中の特産品であるから、それらの商品を売買するために、漢中にいた可能性はある。つぎに、高田時雄氏の論文中で述べられた江藤についての記述である¹⁶。

長安荘江藤涛雄は大正から昭和にかけて活動した骨董商で、西安を拠点に中国各地から多くの書画、骨董、古写本を日本にもたらした。戦前には上野花園町の不忍池畔に「支那美術」を専門とする店舗を構え、青銅器、佛像、古印、瓦磚、書画、陶磁、碑帖、古銭、古寫本などあらゆる分野の中国美術品を扱っていた。長安荘の手を経て、現在、東京大学東洋文化研究所、学習院、国学院、龍谷大学、大谷大学、書道博物館など国内の大学、研究所等に所蔵されている文物はすこぶる多数にのぼる。

記述内容の根拠となった資料が何であったのか明示されていないが、江藤が営んだ長安荘の所在地や取扱品、ここでは前掲資料の漢中ではなく、西安を拠点としたいこと、日本の大学・研究機関・博物館に取り扱った文物が所蔵されていることなど(所蔵情報は展覧会図録やWEBデータベースの検索によって判明したと思われる)、全体的な概略を述べている。

さらに、2019年にオークションで売買された「江藤旧蔵攪胎阮咸」という文物を紹介しているWEBサイトに以下の情報が掲載されている(中国語を日本語に翻訳)¹⁷。

江藤涛雄(1877-1952) 明治十年日本東京埼玉県にて生まれる。1897年帝国大学工科大学卒業(現在の東京大学工学部)、翌年兄の江藤正雄に随い商売をするため中国へ至る。西安を拠点に中国各地に赴き・・・(以下、高田時雄氏の論文を引用)

とある。このオークションのサイトの情報源もはっきりしないが、1877年生まれであること、帝国大学工科大学の卒業生であること、兄の名前は江藤正雄であることなど、新たな情報も加わっている。関野は1895年(明治28年)に帝国大学工科大学造家学科を卒業しているので、江藤は関野の後輩ということになる。『日記』には「江藤氏」とは見えず、かならず「江藤」と呼び捨てで書いていることは、先輩後輩の

関係であったことを物語っている。また、オークションサイトには著名な建築史家である伊東忠太の帝国大学の弟子であり、度々、伊東の中国調査に同行しているとも書いている。このような、情報源となる一次史料を追い切れていない状況で、論文を書くのは心許ないが、本稿では、今後、研究をすすめるため、さしあたりの作業として『関野貞日記』に見える江藤涛雄について情報をまとめておきたい。

2、『関野貞日記』のなかの江藤涛雄

まず、はじめに江藤が登場する『関野貞日記』の記事をまとめ、関野と江藤の関係について見てみる。時期はおおよそ(1)1918年(大正7年)4月～8月北京にて、(2)1928年(昭和3年)～1933年(昭和8年)日本にて、の2期にわけてまとめ、日付順に取り上げ、そこにあらわれる地名・人名に関して少しの注記を付す。なお、ここでは『日記』を現代語表記にしたものを資料として挙げる。

(1) 1918年(大正7年)4月～8月 北京にて

上述のように、関野は1918年4月(大正7年)から1920年まで世界を周遊する。そのなかの北京滞在時に江藤の名があらわれる。

関野は3月17日に奉天から北京に到着し、早速、18日には山中骨董店(山中商会)、20日には琉璃廠の骨董店をまわり、朝鮮総督博物館のため漢代の発掘品を300余円で購入している。21日午後・22日・23日・26日にも琉璃廠に行って古玩を購入している。このうち、22日の感想では「琉璃廠の骨董店では比較的漢代の発掘物が多く、楽浪出土類品は大抵ある、私はこれを極力蒐集した。また、六朝隋唐の遺物・土偶・仏像などもあり、特に珍しきは延古齋にある磁州出土の石門で、武平年間(北齊570-576)のもの雄勁奇抜な逸品である。また漢鴻嘉元年(前20年)の古銅器を得た。その他、瑤瓊を得た」とある。

また、26日の日記には「延古齋・尊古齋・式古齋などを歴覧し、西脇氏の依頼によって式古齋にて周貞を購入した」という。この西脇氏とは西脇銀行社長の西脇濟三郎。関野は前年に奈良で西脇氏と唐招提寺・薬師寺を見学している。西脇氏の紹介で中山龍次¹⁸と会い、さらに中山氏から郵便局長中林氏と郵便局嘱託の黒田幹一氏を紹介された。なお、関野氏は翌日、中山氏の所へ行き、西脇氏依頼の銅器を託している。人間関係のつながりと古物の移動は重要な関係にある。

この間、琉璃廠に一緒に行っているのが、武内金平氏¹⁹と中林氏・黒田幹一氏である。武内金平(1872-1960)は帝国大学法科大学英法科を卒業後、横浜正金銀行入社、大正8年には取締役、昭和2年には副頭取となった人物。黒田幹一(1885-1988)は東京帝国大学文科大学独逸文学科卒後、のちに京城医学専門学校や京城帝国大学で教鞭を執る。

また、骨董店のほかに、3月24日には紫禁城内にある武英殿(中華民国に入ってから古物陳列所となる)、27日には雍和宮、31日には万寿山(頤和園)、4月1日には特別に公使館より紹介をもらい紫禁城へ入る。3日には景山と北京の史跡も見学している。溥儀が馮玉祥によって紫禁城から退去させられたのは1924年であるから、関野が見学した時には、まだ、城内で溥儀が生活していたのである。

① 1918年4月4日 くもり

朝、答礼のため、有賀博士を訪ねた。午後、江藤の案内にて達古齋その他四・五カ所の骨董店を巡った。達古齋は北京第一の骨董店であり、その古物が豊富さは最も抜きん出た(巍然一)の博物館である。そこで漢代の蟠虺鏡を買った。恐らくは前漢の珍品である。双塔寺を見たが、住職が不在で鍵がなかったため入って見ることはできなかった。

いよいよこの日、はじめて江藤が『日記』に登場する。この日は朝に有賀長雄(1860-1921)を訪問している²⁰。その後、午後に江藤と合流し、その案内で琉璃廠の骨董店・達古齋を訪れている²¹。前述したように、すでに数日前、関野は武内金平と黒田幹一と達古齋を訪れている。この日、関野はこの店で蟠虬文の漢鏡を購入している。その後、双塔寺へ行ったとある。おそらく、江藤も同行したのであろう。北京の双塔寺は西長安街の慶寿寺のことで、創建は金・大定26年(1186年)、寺内のふたつの塔はモンゴル時代の13世紀前半に建てられた。残念ながら当日は見るができなかったが、その後、双塔寺は1955年に西長安街の道路の拡張工事のため破壊された²²。

② 1918年4月6日 晴れくもり

午前、江藤と大吉祥古玩処に行き、漢大磚を見て、2、3点の買い物をした。午後武内氏来訪、天気が悪くなっていたので、午後帝王殿へ行く予定であったが中止する。

午前中、関野と江藤で前門外の大吉祥古玩処を見学し、漢代の大きな磚を購入したという。午後には武内氏が来訪する。この時に、江藤が同席したかは不明。帝王殿とは帝王廟のことか。俗に帝王廟と呼ばれる歴代帝王廟は北京市西城区阜成門内大街、北海公園の西に位置し、創建は明嘉靖年間(16世紀前半)で、当初は明清代の皇帝が祀られていたが、乾隆帝の時に三皇五帝以降の帝王を祀るようになった。現在も廟は残っている。なお、前日、4月5日の『日記』には「皇帝廟を見る」とあるが、景德崇聖殿などの建物名をみると、この皇帝廟とは帝王廟を指すと思われる。また、4月5日のフィールドカード²³にも帝王廟のメモが残されている。二日続けて帝王廟見学に行く予定であったということだろうか。

なお、翌日4月7日は中央公園の来今雨軒に行き、中日帝大同窓会に参加している。この会は阪谷芳郎の歓迎と朱深司法総長就任祝いの宴会であった。帝大の出身者約5、60名が参加したという。上述のように江藤も帝国大学卒業であれば、この場に同席していた可能性もあるが、『日記』に江藤の名はない。

③ 1918年4月8日 晴れくもり

午前、武内氏と江藤の案内で、前門外の骨董商大吉祥に行った。銅雀台から出土したと言う見事な獅子(獅子の体の高さは二尺七寸五分)及び石の龍の首も見事であった。また、延古齋で朝博〔朝鮮総督府博物館〕のために購入したものに似た石門を見た。午後、再び(武内氏と江藤の)両氏と城内の骨董店数カ所を見た。ある骨董店で、朝鮮大同江面で発掘した円形石板石に熊脚を付け加えたものと同式の石器を見た。三熊脚を作り円形にしてその上は平滑で、中央に丸い不正形のつまみ石があった。上に蓋があり、蓋の裏はくり上げられ、特にこのつまみの石のところを彫っていて、蓋の上には、3匹のワニに似た龍が蟠結したもので、大変奇抜である。この石の上でつまみの石を使って化粧品のようなものを磨ったのであろうか。大同江面出土のものは、当時は何かわからなかったが、始めて釈然とした。

この日も前々日に引き続き、武内氏と江藤の案内で、正陽門の南の繁華街の前門にある骨董商大吉祥に行っている。ここで関野・武内・江藤が見た「銅雀台の獅子」は、現在、大倉集古館所蔵のものだろうか。銅雀台は三国魏の曹操が鄴の都の西北隅に築いた楼台である。『大倉集古館陳列品目録』(大正7年刊)には見られず、関東大震災では集古館で一部が焼けたことから考えれば、この時期到北京の骨董店に置かれていた獅子像が、その後、日本にもたらされた可能性は高いだろう。なお、1918年6月14日の『日記』に、洛陽の博古堂という古玩店で、大倉集古館のために晋碑を九百二十円で購入したとあることなどから、関野は大倉集古館の収蔵品の蒐集に大きくかかわっていたと考えられる。

午後も武内・江藤とともに骨董店をめぐる。そこで、朝鮮大同江面で発掘した円形石板石に熊脚を付け加えたものと同式の石器を見つけたという。『大正五年度古蹟調査報告』には、関野貞担当部分として「大同郡大同江面古墳」の報告がある²⁴。しかし、本文中および写真のなかには石板・石器は見当たらず、対象文物の特定は難しい。

なお、4月8日の関野フィールドカードには「北京石棺(宋時代)[北京大吉祥古玩処蔵]」とあり、石棺(宋時代)のメモとスケッチが描かれている²⁵。『日記』には記事が書かれていないが、フィールドカードは存在する場合もあるようだ。

④ 1918年4月17日 晴れ 風霾

午前、武内氏宅に至り、同氏が蒐集した仏像その他撮影。午後、武内、黒田両氏と共に江藤の案内にて前門外の骨董商及び旅館に往き、端方所蔵と称する六朝の絶美なる仏像(大吉祥)及び、洛陽から運ばれてきた優秀なる二天像・人物像及び漢画石像を見る。夜、北京へ来て宿泊されていた南満医学教授太田正雄(木下李太郎)氏を訪問する。五日ほど風塵はげしいけれども、本日に至り一天かき曇り暗憺として天日を見ず、霧中に在るかのようで不快極まりない。

③ののちにも、江藤は同行していないが、12日には山中古玩店(山中商会)、13日には前門外骨董店(有賀長文・齋藤少将同行)、15日には骨董商の林屋和作と大吉祥に行き、さらにその日の午後には林屋の所に行き、西安から新たに取り寄せた漢代瓦当30余りの拓本をとっている。このように関野は精力的にネットワークを駆使した調査をおこなっている。そして、④の4月17日の午前中は武内氏所蔵仏像の撮影をおこない、午後に武田・黒田・江藤の三名揃っての案内で前門外の骨董商を訪れている。大吉祥では端方(1861-1911)旧蔵の六朝仏像を見たという。端方は清朝の官僚で1931年にニューヨークメトロポリタン美術館に収蔵された「柘禁」と呼ばれる13点の青銅器群(中国・陝西省宝鶏鬪鷄台出土)の旧蔵者として有名である。彼は1911年に亡くなっており、ほどなく「柘禁」は米国人ジョン・カルビン・ファーガソン(上海・南洋公学校長、張之洞の幕僚、華洋義賑会会長)の手に渡っている。端方旧蔵ということで価値が高まる文物もあったに違いない。その夜は南満医学教授の太田正雄と面会した²⁶。

⑤ 1918年4月20日 晴れ

本日午後、芳沢、伊集院両夫人と江藤の案内で、琉璃廠に行き、骨董品を買った。漢の土偶及び漢玉兔鬼瓦などを獲た。

6 この日は外交官の芳澤謙吉と在支那公使館武官であった伊集院俊とともに、江藤の案内で琉璃廠に行き、漢代の土偶(俑)と漢代の玉器の兔と瓦当(という意味か)を購入したという。こののち、関野は4月31日に北京を出発して大同へと向かった。北京の西直門の駅から列車に乗り、オズワルド・シーレン²⁷と同室で、日本中国の古代美術のことについて談話したという。その後、大同では雲岡石窟を訪問し、5月8日に大同から再び北京に戻った。その後の北京の滞在日記には書かれていない。そして、5月18日に北京を旅立つ。

⑥ 1918年5月18日 北京発房山着 風塵

午前八時四十分発の列車にて橋本氏と袁とを伴い、武内・黒田・江藤諸氏に停車場まで見送られた。劉氏もまた同行した。午後一時過ぎに張口店に到着した。

いつもの武内・黒田・江藤の見送りを受けて北京近郊へ出発。張口店→保定→正定→彰徳→鄭州→開封→鞏県→洛陽→龍門→偃師→登封→少林寺→石家莊→太原→天龍山と精力的にめぐり、7月4日に北京へと帰還した。特に天龍山の石窟の調査はいわゆる「天龍山石窟の発見」と呼ばれるほど重要なものであった。

⑦ 1918年7月7日 陰 北京

午前、武内氏を訪問し、午後、同氏と江藤を伴い、南門外の古玩舗を歴訪した。

⑧ 1918年7月10日 晴 北京

午前、武内氏と江藤を同伴し、琉璃廠前門外の骨董舗を歴訪した。

⑨ 1918年7月22日-25日

この間格別に記すべきものはない。ただ、三・四人の友人を訪れた。武内氏と江藤を伴い古玩店に往ったことと、拓本および衣類の整理をただけである。

7月4日に石家莊経由で北京に戻ってきた関野は扶桑館に投宿し、⑦7日午後に武内・江藤とともに南門外の骨董店に行っている。8日には武内氏と山本照相館に行き、⑧10日にまた武内・江藤と琉璃廠を訪れている。その後、旅の疲れからか、体調を崩し、同仁病院に入院するなどをして過ごし、⑨7月22日～25日にも特段記載すべき程の活動はしていないという。しかし、それでも武内・江藤とともに骨董店に行っている。そのような体調のなかで、7月26日には北京を発ち、8人の参加者とともに、再び大同・雲岡を訪れ、29日に北京に戻ってきた。

⑩ 1918年8月5日 晴れ 北京発天津着

午前八時、船津・中林・黒田・中山・武内・山中・久保田夫人・柿内・吉川・佐藤(三郎)・三澤・佃・山本・橋本諸氏の見送りを受け北京を出発。江藤を同伴し、天津着、弥生館に投宿した。午後、太田孝太郎氏を訪問し、同氏と共に方若氏を訪問。同氏所蔵の磚・瓦・銅印を見て、夕刻、太田氏方に至り、晚餐の饗を受け、夜十時方若氏経営の新世界様の大建築の屋頂に方若氏と共に涼をとる。屋上園遊人沓至雑沓を極める。月無く、風死し、地上百尺の屋上煩熱を覚えただけであった。この夜、暑さは甚だしく、寝返りをうって、ほとんど夢を見て寝ることはできないほどであった。

8月5日、いよいよ、関野は北京での最後の日を迎える。北京で交流した人々の見送りを受け、江藤を同伴し、天津へと向かう。天津では太田孝太郎²⁸と方若を訪問し、氏所蔵の銅印・磚・瓦を見学した²⁹。翌日、北京から来た武内氏が車に同乗し、済南へと出発する。この8月5日の天津への同行以降、江藤の名は『日記』には現れない。天津到着後、江藤は関野のもとを離れたか、もしくは関野が済南へと出発した際に、別れたのかもしれない。関野はこのあと天津から済南・青島・上海・蘇州・南京・杭州・紹興・寧波を経て上海へと戻り、10月15日には上海から船に乗り、香港を経由して、10月25日にはシンガポールへと至る。以降、1920年(大正9年5月17日)に東京に帰還するまで、インド・ヨーロッパ・アメリカへの旅が「遊西日記」には書き残されている。

以上が『日記』に見られる、北京における江藤涛雄の活動である。関野は常に武内・黒田、そして江藤とともに骨董店を訪れた。記述の中で、ひとつだけ気になることは、江藤の所蔵品を関野が見に行くといった記載がない点である。武内の所蔵品を見たり、写真を撮ったりという記事はあり、黒田の家でも所蔵の古銭を見に行っている。しかし、江藤の家に行って、文物を見るところは一度もない。また、

日本人であっても、山中商会のように北京に店を持っている骨董商もいたが、江藤は地元の骨董店のことはよく知っているようだが、自分の特定の店を持っていないように思われる。こののち、彼は東京で自らの店舗「江藤長安荘」をもつことになる。

(2) 1928年(昭和3年)～1933年(昭和8年) 日本にて

さて、昭和に入ってから、わずかであるが『日記』に江藤が登場する。この時期、彼らが出会った場所は大陸ではなく、日本である。

⑪ 1928年(昭和3年)9月21日 晴

午後、細川侯が来学し、六朝石仏写真及び白石君の銅仏を一覧し、博物館に往き、江藤を訪問し、大学へ帰る。

細川侯は細川護立(1883-1970)で、『日記』には1927年(昭和2年)12月7日、細川護立将来の漢金絵洗金銀錯銅頓鏤を見るという記事ではじめて登場する。細川は1926年2月から1927年7月までヨーロッパに滞在中、C. T. Looらパリの骨董商とも交流し、帰国後も積極的に中国文物を収集した。特に、この1928年3月26日には早崎稔吉から西安の宝慶寺石仏18体(唐)および白玉製菩薩半跏思惟像(北魏)を購入している³⁰。この『日記』の時期は、ちょうど細川がこのような中国の仏像を集中的に収集していた時期にあたる。彼は文物を購入する際のアドバイスを関野からももらっていたようである。『日記』によると細川は2日後の23日に白石君の銅仏を15000円で購入することを決定したという。この日の関野は東京帝国大学で細川と会い、おそらく上野の帝室博物館へ行き、その後、江藤の所へよって、大学に帰っている。江藤の開いた「江藤長安荘」は上野池之端にあり、博物館と帝国大学をつなぐ途中に位置している。移動のうちに、訪れたのであろう。なお、『日記』にはほかにこのころの江藤とのエピソードは書かれていないが、1928年(昭和3年)7月20日の関野フィールドカードには「北魏造像」・「延興五年造像」とともに江藤涛雄氏蔵とのメモを見ることができる³¹。ただし、『日記』の7月20日の欄は空白で、どこで江藤の蔵品のスケッチをしたのかはわからない。

⑫ 1930年(昭和5年)12月21日 晴

午前七時京都市着。田辺氏・江藤と共に藤井・山中・太田諸氏蒐集の支那遺物を見る。

朝、京都に到着した関野は田辺と江藤と合流して京都内の収集家の中国文物を見ている。藤井は1926年(大正15年)に藤井有隣館を開館した藤井善助であろう。前述したように藤井収集の敦煌写本は江藤長安荘から購入した可能性が指摘されている。それよりも十年前の二人の関係をこの記述では何うことができる。山中は山中商会の山中定次郎である。なお、関野・江藤と山中は前述のように北京で出会っている。なお、関野は、翌日は川合定次郎・守屋孝蔵といった京都の収集家と面会し³²、さらに12月23日には藤井氏と大阪へ行き、山中商会、村上春鈞堂等を訪れている³³。ただ、江藤がいつまで関野に同行していたのかはわからない。

また、翌年、昭和6年4月7日の関野フィールドカードには「唐・広徳二年鐘 江藤涛雄氏蔵 [図面]」とある。この日の『日記』には、関野は「伊藤博士の外局長室にて課長・事務局阪谷その他関係者、沖縄神社の件につき協議。午後六時朴氏(朴在杓・朴尹錫?朝鮮名画展覧会関係者)の招宴(翠松亭)とある。」とあるのみで、どの時点で江藤と合っているのかはわからない。なお、このカードにかかれた「広徳二年鐘」はのちに書道博物館蔵品となる。江藤と中村不折の関係がうかがえる。

⑬ 1933年(昭和8年)4月23日 晴陰

午前、林屋、江藤、江浪ら来訪。午後、故塚本君法会、伝通院列席。

林屋は1918年4月15日に北京で会った骨董商林屋和作のことか。江浪は『日記』の1931(昭和5年)10月、平壤で「江浪来たり、楽浪鏡三枚持参」と見える人物で、平壤金町に江浪古玩堂がある³⁴ことから、江浪はこの骨董品店の店主であろう。そして、ここに江藤が加わり、それは中国・朝鮮で活躍する日本人骨董商の集結といったところだろうか。午後は塚本君、すなわち塚本慶尚氏(1894-1931)の法要である。塚本は関野貞の弟子で多くの国宝建築物の修理・保存にたずさわった。昭和6年4月の『日記』に塚本君病気見舞いとあり、その後、4月25日に亡くなっている³⁵。ここでは4月23日の記事であるから三回忌の法会ということになるだろうか。午前中に集結した江藤等三人が午後の塚本氏の法要に出席したかはわからない。以上が『日記』に登場する江藤の最後の記事である。

①から⑬まで、時期にすると、1918年から1933年までの江藤と関野の交流の一端を知ることのできる日記史料であった。具体的に二人がどのような意見をかわしたのか(骨董の価値や入手ルートなど)については、この『日記』からはわからないのが残念であるが、人に読ませるための文書というわけではないので、これが日記史料の限界であろうか。

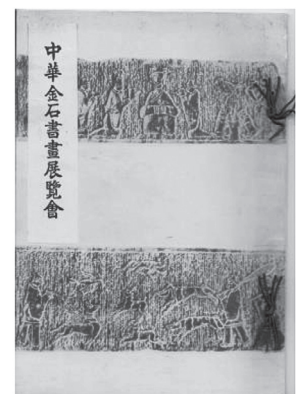
3、江藤長安荘「中華金石書画展覧会」について

本稿の調査の過程で、江藤長安荘主催による「中華金石書画展覧会」の目録を古書店から入手した。最後に紹介しておきたい。展覧会は1931年(昭和6年)10月23日から26日まで、東京の日本橋区通2丁目5番地の東京美術倶楽部(東美倶楽部)を会場におこなわれた。住所をたどると、東美倶楽部は現在の日本橋高島屋の一部にあたることになる。主催は川合尚雅堂支店(京橋区西銀座6丁目4番地)と江藤長安荘(下谷区上野花園町4番地)、後援は金石同好会とある。江藤長安荘のあった上野花園町は現在の池之端3丁目にあたる。不忍池の北側、上野動物園の裏というべきか、東京国立博物館から1kmあまり、関野がいた東京大学までも1km程度で、いつでも関野と会うことのできる距離に位置していた。中村不折の書道博物館へも1kmあまりで近い。

さて、展覧会目録を見ると、青銅器から仏像、俑、書画までの中国文物446点がリストに載っている。いくつか、銘文・紀年を有するものなど、目を引くものを挙げると、「周銅饗餐文鼎」「漢鍍金獸耳連環大円壺」「魏大和年式紅銅両面大仏」「魏太平真君三年弥勒半跏像」などがある。これらの文物がその後、どのコレクターへと渡ったのかは今後の検討課題としたい。

この展覧会の会期中、すなわち、1931年10月23～28日の関野の『日記』には、天気のみが書かれており、残念ながらこの展覧会に顔を出したという記載はない。これより前、関野は1931年(昭和6年)6月に中国北京を訪れているが、江藤に会ったという『日記』の記述はない。このころ、江藤は江藤長安荘を立ち上げ、活動の拠点を日本に置いて活動していたのであろう。

さて、この展覧会を訪れた東洋史学者に東洋文庫の石田幹之助がいた。彼は『長安の春』のなかで、以下のように書いている。



予は昭和六年十月二十五日東美倶楽部に於ける江藤濤雄君の蒐集品展観の席上、「唐回回美人俑」(一六七号)と題した一泥像を見たが、回回云々と云ふのは勿論古玩輔の漫に命命したもので取るに足らぬ。面貌は優婉の趣を欠いていたが、長身の姿態と服装とは或いは之を所謂胡姫の輩と見ていかと思はれた。(『長安の春』)

という。いま展示目録を確認すると、「166 唐官装美人土偶 167 唐回回美人土偶 168 唐洋装美人土偶 169 唐コバルト土偶 170 唐三彩大馬」と唐三彩俑が並んでおり、石田の言う167番の「唐回回美人俑」は土偶と俑と表記は異なるが同一のものである。石田の言を見ると目録には川合尚雅堂との共催とあるが、この展覧会は江藤濤雄の蒐集した文物の展覧会であったようである。今後も、本展覧会目録を活用しつつ、江藤という骨董商の動きをつかんでいきたいと思う。

おわりに

以上、本稿では『関野貞日記』に見える江藤濤雄に関する記述についてまとめた。私が彼に注目するようになったのは、「江藤長安荘」という商号に興味をもったことも一因である。今回の調査では江藤の北京での動きに関する情報しか集まらなかった。彼が拠点とした古都・長安での生活はどうだったのか、骨董品の売買の事情はどうだったのか。彼自身に関する資料が発見されることを期待するとともに、周辺の関係者の資料も逐次収集してゆきたいと考えている。

注

- 1 東京大学総合研究博物館小石川分館「関野フィールドカード」http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DAnnex/sekino_cards/home.php
- 2 関野貞「遊西日記」に関する解説としては、関野貞研究会編『関野貞日記』(中央公論美術出版、2009年)所収の大西純子「中国旅行の日記について—『中国旅行日記』と『遊西日記(中国)』」、藤井恵介「関野貞のインド旅行」、角田真弓「関野貞が見た西洋の建築」、大西純子「『遊西日記』欧米にて一出会った人々など」を参照のこと。
- 3 『日記』には、2人の名前を示さずに「ヤ」、「イ」と書き込まれていた日もあった。ちなみに、谷井の読みは「やつい」である。
- 4 学習院大学東洋文化研究所編『知識は東アジアの海を渡った—学習院大学コレクションの世界』丸善プラネット、2010年。
- 5 旧制学習院歴史地理標本室の受け入れ原簿によると、江藤から購入した文物は以下の通り。
 - ・大正11年(1922年)12月27日:穀粒文玉璧・牛車型明器・緑釉狗明器
 - ・大正12年(1923年)3月19日:玉璋
 - ・大正13年(1924年)9月4日:唐三彩馬俑・唐三彩鎮墓獸俑・唐武人俑2体
 - ・大正14年(1925年)8月2日:宜子孫銘方磚・緑釉倉明器・北魏造像銘石片4回のうち、1922年と1923年3月は関東大震災の前であり、震災による歴史地理標本室の復旧より前から学習院と江藤の間で取引があったことになる。おそらく、納品時には江藤は日本にいたのだろう。なお、旧制学習院歴史地理標本室移管資料の全貌については『百聞ハ一見ニ如カズ—旧制学習院歴史地理標本室移管資料』学習院大学史料館、2013年参照。
- 6 筆者がおこなった「アジアを学ぶ—近代学習院の教育,人と人とのかわりから—」と題した講演に際し、鈴木舞氏(現在、東京大学助教)からいただいた調査情報による。(講演録は『学習院大学国際研究教育機構研究年報』1号,2015年所収)

- 7 青柳正規・西野嘉章編『東アジアの形態世界(東京大学コレクションI)』東京大学出版会、1994年
- 8 『東京芸術大学芸術資料館蔵品目録』東京芸術大学芸術資料館、1990年参照。「白釉花文枕」は近年、東京芸術大学で修復・再現がなされている。『図録東京芸術大学創立130周年記念特別展 藝「大」コレクションパンドラの箱が開いた!』東京芸術大学、2017年参照。
- 9 鍋島稲子「不折旧蔵写経類コレクションについて」『中村不折旧蔵禹域墨書集成:台東区立書道博物館所蔵』二玄社、2005年。なお、大正3年の江藤に関しては、外務省外交史料館所蔵「清国革命動乱による本邦人損害要償一件/査定書の部」(JACAR Ref.B08090237900)の天津の邦人の辛亥革命による被害補償申請者に名が見える。3月4日に申請・報告し、査定額が決定されたのが5月2日であるから、その間や直前にも天津もしくは中国大陸に滞在していた可能性もある。それゆえ、田中文求堂を介して販売したのかも知れない。
- 10 前掲注(9)鍋島論文によれば、中村不折『禹域出土墨寶書法源流考』草稿から、関東大震災(1923年)後まもなく中村不折の手に渡ったという。
- 11 兼平充明「書道博物館蔵『後秦呂憲墓表』について」『明大アジア史論集』7号、2002年
- 12 1928年(昭和3年)12月に江藤から手に入れた。江藤長安荘の展観で出品し、江藤長安荘の展観で出品、不折が江藤と交渉している現場を、西川寧が目撃したというエピソードもある(鍋島稲子「書道博物館と中村不折コレクション(5)」『精錬』7号、銅山書道会、2007年
- 13 高田時雄「日蔵敦煌遺書の来源と真偽問題」『敦煌写本研究年報』9号、2015年
- 14 山中商会については、朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ―東洋の至宝を欧米に売った美術商―』新潮社、2011年(のち、『東洋の至宝を世界に売った美術商:ハウス・オブ・ヤマナカ』新潮文庫、2013年として再刊行)、C.Tルー(盧芹齋)については、羅拉『盧芹齋伝』新世紀出版社、2013年(フランス語版 Geraldine Lenain 'Monsieur Loo' の中国語訳)などがある。
- 15 広田不孤斎『骨董裏おもて』国書刊行会、2007年
- 16 高田時雄「日蔵敦煌遺書の来源と真偽問題」『敦煌写本研究年報』9号、2015年
- 17 易拍全球・中鴻信「Lot3008 江藤旧蔵攪胎阮咸」https://www.epailive.com/goods/12981795?buriedPoint=zc_01 (2020年9月30日確認)
- 18 中山龍次は通信技師でこの時は中華民国交通部電政顧問として北京に滞在していた。西脇氏と同じ新潟出身。外務省外交史料館所蔵「支那傭聘本邦人人名表 大正7年12月現在」(1919年作成)(JACAR B02130233000)参照。
- 19 『日記』では度々「竹内」と記されているが、渋沢社史データベース(<https://shashi.shibusawa.or.jp/index.php>)で確認すると武内金平とある。以後、本稿では『日記』で「竹内」とあっても、「武内」に修正して資料を挙げる。
- 20 有賀は法学・外交史学者で東京帝国大学・早稲田大学教授を歴任し、1913年より中華民国大總統府(袁世凱政権)法律顧問として招聘され北京に滞在していた。外務省外交史料館所蔵「支那傭聘本邦人人名表 大正7年12月現在」(1919年作成)(JACAR B02130233000)参照。
- 21 達古齋の店主・霍明志(Paul Houo-Ming-tse、生没年不明)は浙江省紹興の人でかつては張勳のもとにあり、その復辟失敗後、この骨董店を始めた。多くの目録類を刊行し『達古齋博物彙誌』(1914年)、『達古齋博物補史』(1929年)『達古齋古証録』(フランス語版、北平刊行、1930年)、『達古齋真富指南』(中原印刷社、1944年)などがある。なお、中国歴史博物館開館にあたって1949年6月5日に霍明志は1万点以上の文物を寄贈したという(中国歴史博物館編『中国歴史博物館80年』40~41頁、1992年、中国歴史博物館)。
- 22 邱崇祿「従一張老照片中引出双塔慶寿寺里的故事」『西城追憶』2007年3期
- 23 関野フィールドカード36-015「北京 帝王廟 [景德崇政殿平面図]」
- 24 朝鮮総督府編『大正五年度古蹟調査報告』朝鮮総督府、1919年
- 25 関野フィールドカード33-031
- 26 太田正雄(1885-1945)は医学者・詩人・作家・美術史家。1911年東京帝国大学医科大学卒業。1916

年から1920年まで満鉄附属地の南満医学堂教授兼奉天医院長を勤めた。その後、1937年東京帝国大学教授となる。木下杢太郎の筆名でも執筆活動をおこない、のちに『大同石仏寺』(木村荘八と共著、日本美術院、1921年)を刊行した。(国立公文書館所蔵「故東京帝国大学教授太田正雄叙勲の件」(昭和20年11月)、JACAR A10113533100、参照)

- 27 Osvald Sirén (1879～1966) スウェーデンの中国美術史研究者。
- 28 太田孝太郎(1881-1967)は当時、武内金平と同じ横浜正金銀行天津支店に勤務していた。その頃、中国の古印を収集し、のちに『漢魏六朝官印考』1966年を刊行した。
- 29 方若(1869-1954)は浙江省出身、天津にて多くの古物を収集した。
- 30 石松日奈子「永青文庫の中国石仏ー早崎稷吉と細川護立」『季刊東洋文庫』105号(石からうまれた仏たち)、2019年
- 31 関野フィールドカード「北魏造像」33-009・「延興五年造像」33-010
- 32 関野フィールドカード41-063には昭和5年12月22日に「京都川合定次郎氏蔵遺物」があり、氏所蔵の中国の仏像を実見していることがわかる。
- 33 関野フィールドカードには昭和5年12月23日に大阪山中商会(33-012)・笹川慎一蔵品(33-013)・浅野竹石山房(33-014)・村上春鈞堂(33-015)のカードが見える。
- 34 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ(<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/>)には「楽浪郡絵はかき」(江浪古玩堂(平壤))とある。
- 35 国立公文書館「故塚本慶尚位記追賜ノ件」(1931年)、JACAR A11114051000、参照

追記：本稿でとりあげた『関野貞日記』の該当箇所に関する情報は以下の淑徳大学人文学部歴史学科3年生が授業で収集したものを活用した。教員、学生共に授業と研究がつながることを実感した論文となったと思う。

佐藤陽太郎・小山楓・小林英稔・慶保一弥・井嶋崇斗・穴澤拓実